

## 第四十三回 真田丸と松江城

～近頃注目の二つの城～

山本 忠博

今回は、最近注目の二つの城を紹介します。真田丸と松江城です。真田丸は以前にも書きましたが、現在の大河ドラマになっていて今が旬の城ですし、最近の研究でだいぶその実像が見えてきましたので、あらためて紹介させていただきます。もう一つの松江城は、昨年に国宝に指定されたばかりで、やはり今が旬の城です。

## 真田丸

慶長19年(1614年)に起こった大阪冬の陣は、徳川家康が大阪城の豊臣家を潰しにかかった戦いです。真田丸は、この戦いの直前に、真田信繁(通称幸村)によって大阪城の南東側に築られました。現在の大阪市天王寺区の明星学園の辺りに在ったと推測されています。俗説では、城の南側の弱点を見抜いた信繁が、その弱点を補うために築いたとされますが、それは信繁ファンの願望に過ぎません。前にも書きましたが、南側は弱点というより、敵を引き付けるための誘いとみるべきでしょう。それに、真田丸の在った城の南東側は、城の外に深い谷が切り込んでいたので、かなり守りの堅い場所だったのです。では、なぜここに信繁が出城を築いたかといえば、次のような理由が考えられます。

①城の南に攻め掛かるであろう徳川軍に、南東側から側面攻撃を掛けられる。②城の南東側の地形(真田丸南の篠山)を利用して、動かぬ敵にも攻撃を仕掛けられる。③最前線で目立てる。

真田丸が築かれた大阪城の南東側には、戦の前から寺町が在ったようです。そこの複数の寺を取り込んで、真田丸は築られました。ここで注目すべきは、寺の存在です。戦国時代の寺には、その壁や石垣を利用して、いざという時の陣地として使う目的がありました。寺町が存在したということは、もしかしたら、大阪冬の陣のずっと前から、この地域を非常時の城郭として使うプランがあったのではないかと、筆者は妄想しています。

## 豊臣方は勝てたのか？

大阪冬の陣は、皆さんご存知のとおり、一時的な和睦という形で終結しました。豊臣方は、真田丸の戦いで勝利していましたから、そのまま戦っていれば勝てたのではないかと、よく言われます。しかし、それは無理だったでしょう。一説に、真田丸の戦いで、豊臣方は準備した弾薬の半分を消耗したといえます。単純に考えて、もう一回大規模な戦闘が行われたら、豊臣方はそれで終わりです。それに、徳川方は、塹壕戦を展開しています。地面に溝を掘って隠れ、その溝を掘り進めて城に近づく戦法ですね。これで豊臣方は徳川兵を狙撃できなくなりました。それから、徳川方のとっておきは数百門の大砲です。当時の日本の大砲の射程は100m程度ですから、直接攻撃に限界があったとはいえ、徳川方は、昼夜の別なく大砲を撃ち、その大音響で豊臣方の兵卒を精神的に追い詰めました。さらに、徳川方の大砲の中には、より長い射程のものもありました。家康は、大阪冬の陣の前に、イギリス商人を介して、射程500mの大砲を4門輸入しています。これであれば、天守閣も射程圏内に入ります。

豊臣方に勝つチャンスがなかったとは言いません。しかし、豊臣方のおかれた状況をまとめると、①塹壕と坑道を掘り進んだ徳川兵に、いつ、石垣とその上の櫓を崩されるか分からず、②大砲の音で夜も眠れず、③届かないと思っていた敵の弾は天守閣まで届き、④敵兵を狙撃しようにも敵兵は塹壕の下にいて狙えず、⑤そもそも撃つ弾の蓄えが心もとない……と、いうことになります。これでは、戦闘継続はかなり難しかったと思います。徳川方も兵糧不足に悩んでいた事実はありますが、外で自由に動ける徳川軍と、外からの援軍と補給を望めない豊臣軍では、大きな差がありました。

家康の採用した塹壕と大砲の組み合わせは、近代戦における攻城戦術の定石で、当時の最先端の戦術でした。対する大阪城の木造建造物、特に天守閣は、格好の標的になるだけで、大砲に対しては、いっさい防護機能を有しま

せんでした。最先端の攻城戦術と従来通りの籠城戦術という戦術面での差も、大きかったと思います。大阪冬の陣は、それまでの日本式築城術の、限界を示した戦いでもありました。(ちょっと言い過ぎかな……まあ、筆者の妄想ということ。)

## 真田丸と松平直政

真田丸の戦いの際に、大負けした徳川方であって、勇名を馳せた人物がいます。松平直政です。直政は、徳川家康の次男である結城秀康の三男にあたる人物です。早い話が、家康の孫です。母の身分が低く、幼少期は家臣に預けられて育ったといえますから、その経歴は父の秀康に似ています。

大阪冬の陣は、直政が数えて14歳の時に起こりました。この戦いが直政の初陣です。直政は、真田丸を攻めあぐる徳川軍であって、銃弾が降り注ぐ中を、家臣の制止を振り切って真田丸まで突き進んだといえます。このときに、真田丸に肉薄する直政と真田丸の信繁の間で次のような会話がなされたとか。信繁「元気良いねえ。でも、ここは、指揮官が先頭で来ていいような柔な仕掛けじゃないよ。だから、この出城が落ちてからおいで。その時には、この首をあげるから。」直政「落ち目の人の首を取ったってダメなんだよ。この出城が絶好調の時に、その仕掛けを破って貴方の首を取る方が、断然かっこいいじゃん。」この会話の最中に、信繁は、直政に軍扇を投げ渡したと伝わります。

できすぎた話なので、その信憑性はあやしいですが、大阪の役の後、直政は家康からその戦いぶりを激賞され、その後に順調に出世したことは確かです。

## 直政と松江城(ついでにちょっと松本城)

松平直政は、着実に出世を続け、寛永10年(1633年)に信州松本7万石の大名として松本城に入りました。直政は、松本城の天守閣に月見櫓と辰巳附櫓を増築して、それを今に伝わる優美な姿に仕上げています。

寛永15年(1638年)には、さらに加増を受けて、雲州松江18万6千石(+隠岐1万4千石代理統治)の国持大名(国主)となり、松江城に入りました。松江は、後世において、「怪談」を著した小泉八雲(ラフカディオ＝ハーン)が一時期住んでいた所です。彼の妻が松江出身で、彼に怪奇話を語っていたといえますから、松江には、その手の話が多くあったのでしょう。直政が松江城に入った時のエピソードとしても、こんな話が伝わっています。

初めて天守閣に上がった直政の前に、鬼女が現れ、繰り返して、こう言うのです。「この城は私のものだ」と。困った直政は、とりあえず「わかった。この城をつかわそう」と、言ってしまいます。しかし、本当に城を渡す訳にもいかず、窮した直政がとった手は、「コノシロ」という魚(出世魚のコ

ハダのこと)を供えるという、鬼女もビックリのダジャレ返しでした。以来、この鬼女が現れることはなかったそうです。直政は、「油口」(口が達者)だったといわれますから、頭の回転も良かったのでしょうね。

ちなみに、直政が信州から持ち込んだ蕎麦文化が、出雲蕎麦の起源とされています。

## 松江城

宍道湖の東側に位置する平山城で、その堀は、宍道湖およびその周辺の河川と一体化しています。この城を築いたのは、堀尾吉晴という武将で、豊臣秀吉に早くから仕えて、豊臣政権内で三中老という役職(こんな役職はなかったという説もあります)にあった人物です。吉晴は、関ヶ原の戦いでは徳川方に付いており、その際の息子の戦功により出雲の地を与えられ、月山富田城に入りました。しかし、その地の不便さから松江城を築城することになります。

松江城が築城された慶長年間(1600年代初頭)は日本全体が築城ラッシュの時期だったためか、吉晴は、材木の調達で苦労したようです。その苦労が、この城の特徴となり、昨年に国宝となる一つの理由になりました。天守閣の中に入って柱を見れば一目瞭然ですが、大方の柱は継ぎはぎだらけです。それに、天守閣を上から下まで通る大黒柱がありません。これは、上述した苦労の現れで、古い木材や細い木材を使うために、継ぎはぎして一本の柱に仕立てたからです。結果として、大黒柱のような長い柱は用意できなかったため、2階分の長さの柱を多数用意し、1階から2階の柱、2階から3階の柱、3階から4階の柱というように組み上げることになりました。

松江城の国宝指定は、この城に関わる人々の昔からの悲願でした。それでは、何故、それまで国宝にならなかった(正確には、国宝から格下げされていた)かということ、築城時期が特定できなかったからです。しかし、2012年に、松江神社から、松江城の築城の際の祈祷札が見付かり、その札の日付から、慶長16年(1611年)に松江城が落成したことが明らかになりました。

ちなみに、松江城の天守閣に、直政が真田信繁から送られたという軍扇が展示されています。ご興味のある方は、一度松江を訪れてみてください。しっとりとした良い所ですよ。



祝国宝松江城(松江市ウェブサイトより転載)